

はじめに

21世紀はITの時代となる。それは、単にITによってグローバルな情報が瞬時にキャッチできるとか、ローカルなそれが世界に発信できるとかの技術的な便利さというよりも情報そのものの取捨選択とその活用能力が求められる社会である。グローバルな世界とローカルな自分の見極めが要求される社会である。だが、IT化の波は一様ではなく、その格差による不平等な社会・経済現象も拡大の一途をたどっていることも見逃せない。

スポーツの世界にもこの波は確実に押し寄せている。IT化によって地球の裏側のスポーツイベントをリアルタイムで見ることができ、しかもそれらが魅力的であれば、ローカルな国内のスポーツへの関心が薄れ、一気にグローバルなスポーツに目が向けられることになる。中田やイチローの活躍が端的にそれを示している。国内のJリーグやプロ野球は、その強力なパフォーマンスに目を奪われ、新鮮さを失う。そこにはローカルな自分を見つめる芽が育っていないと気づく。

戦後わが国の復興にスポーツの果たした役割は大きい。しかし、それは個人の努力によるものであり、学校と社会を結ぶシステムチックなものではなかった。学校は子ども達にスポーツ経験を与えたが、その成果は校門を出ず、また地域スポーツは社会行政の手に委ねられ、これまたスポーツ経験の提供に終始し、自らスポーツを楽しむ方法や思考を教えるには至らなかった。それがために自主・自立のスポーツ活動や組織が地域で活発に行われることは少なかった。これには様々な要因が挙げられるが、この分野の教育・研究に携わる側の取り組みが不十分であったこともまた看過できない。

こうした自省のもとに、わがスポーツ科学研究室での共同研究の取り組みが始まったのは1970年代半ばからであった。そのテーマは「『国民スポーツ運動』の国際比較研究」「国際スポーツ組織の歴史・社会学的研究」「各国社会における生涯スポーツの研究」「国際化とスポーツ政策」「スポーツのグローバル化と多元性」等である。いずれもわが国のスポーツ政策、運動、理念を見据え、スポーツが抱える先端問題に焦点を絞ったプロジェクト（科研費補助）を立ち上げ、取り組んできた。しかし課題の大きさと多さに息もつけない状況である。

そんな最中に、わが研究スタッフの牽引的存在であった関春南氏が定年で退職された。氏は『戦後日本のスポーツ政策』をまとめ上げ、わが国のスポーツ政策について歴史的社会的な手法で問題点を浮き彫りにした。われわれは、氏の成果を批判的に学びながら新たな問題へとさらに歩を進めなければならない。

本年報は関氏の退官を記念すべく、しかるべき構成をすべきであったが、今回は、文部科学省科学研究費によるテーマ「スポーツにおけるグローバル化と多元性」の最終報告の体裁を取った。しかしそれぞれの論文は関氏への思いを込めて執筆されている。忌憚のないご意見・ご批判をいただければ幸いです。

2001年8月15日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 早川 武彦